

【特別支援学校用】

令和7年度学校評価 結果

達成度(評価)	
A	: 十分達成できている
B	: おおむね達成できている
C	: やや不十分である
D	: 不十分である

学校名	佐賀県立ろう学校
1 前年度 評価結果の概要	・全項目A評価とした。 ・県内唯一の聴覚障害教育の学校として、専門性向上を図ることができた。 ・幼児児童生徒の将来の自立や社会生活に必要な力の育成に取り組んだ。進路保障においては、個々の生徒の希望進路をサポートすることができた。 ・日本語の「読む・書く・話す」力とコミュニケーション能力の育成に取り組む、一定の成果を上げることができた。 ・本校の取組に関する情報発信力を強化するためにHP・インスタグラム更新、学校だより発行、学校行事への外部参加の促進等を行った。 ・各種学校行事を幼児児童生徒が主体的に参加できるよう企画運営した。

2 学校教育目標	県内唯一の聴覚障害教育の学校として、幼児及び児童生徒一人一人の個性や能力、教育的ニーズに応じて、幼稚園・小学校・中学校・高等学校に準ずる教育を行い、確かな学力、豊かな心、健やかな体を育み、将来、自立し社会参加できる力を育成する。
----------	--

3 本年度の重点目標	(1)聴覚障害教育の専門性の向上を図るための研修の充実及び校内研究の推進 (2)幼児児童生徒の個性や能力、教育的ニーズに応じた、きめ細やかな指導の実現 (3)地域のニーズに応える聴覚障害教育のセンター的機能の充実 (4)学部間の連携による「チームろう学校」としての組織体制の確立 (5)社会に目を向け、自ら考え、豊かに生きる力を育成するキャリア教育の推進
------------	---

4 重点取組内容・成果指標 5 最終評価

(1)共通評価項目		重点取組		具体的取組		最終評価	
評価項目	取組内容	成果指標(数値目標)	達成度(評価)	実施結果	達成度(評価)	実施結果	達成度(評価)
●学力の向上	○児童生徒一人一人のニーズに応じた指導・支援による確かな学力の定着	○年間3回(毎学期)の保護者との面談を通して個別の教育支援計画や個別の指導計画等を作成し、目標達成を図る。 ○生徒全員の明確な進路意識の向上を図る。 ○希望進路の実現を100%目指す。	B	・年度初めや学期末ごとに保護者と担任が面談を行った。個別の教育支援計画を作成し、保護者と確認を行った。個別の教育支援計画の確認作業が予定より遅れた。個別の指導計画では、前期の評価を行い、後期の計画を立てて指導に生かし、年間を通して活用した。 ・適切な時期に、適切な内容の進路指導部の取り組みを行うことで、生徒の進路意識の向上につなげることができた。 ・高等部3年生について、第一希望とする会社への就職が決定した。	A	・事前講師との十分な打ち合わせを行ったことで、年間8回の研修を予定通りに実施でき、内容でも実りある研修となった。また、各学部の研究研修部を中心に、学部研究も計画通りに進めることができた。その成果や課題を踏まえ、来年度の研究を充実させていく。	A
	○聴覚障害と他の障害を併せ有する、幼児・児童・生徒の指導の充実を図る。そのため、年に17回以上の職員研修を行い、実践的な指導力の向上を目指す。	・全職員を対象として、実践力向上のための研修を年8回実施する。学部研修は月2回実施し、専門性の向上を図る。また、全11回の新任者研修を実施するとともに、それらを自主研修とし、学びたい職員の研修の場とする。(研究研修部)	・児童生徒の希望やニーズを把握するために面談、進路希望調査を実施する。 ・就業体験、事業所及び学校見学、進路学習会、ジョブティーチャー派遣、企業現場における作業学習などの進路指導の取組みを充実する。(進路指導部)	・1学期に講師との十分な打ち合わせを行ったことで、年間8回の研修を予定通りに実施でき、内容でも実りある研修となった。また、各学部の研究研修部を中心に、学部研究も計画通りに進めることができた。その成果や課題を踏まえ、来年度の研究を充実させていく。			
	○日本語の「読む・書く・話す」力とコミュニケーション能力の育成	○日本語の「読む・書く・話す」力を各学部で設定した評価テスト等を年に3回実施し、評価が向上した幼児児童生徒の割合が70%以上	・読解力、話し言葉など、幼児の実態に合ったきめ細やかな言語指導を実施する。(幼稚園) ・日記指導や言葉集め、教科指導の中での言葉のやりとりを丁寧に行う。(小学部) ・自立活動を中心に、読解力、文法、書き言葉や話し言葉などきめ細やかな言語指導を実施する。(中学部) ・生徒の実態に応じ、全ての教科・領域において、言語指導の視点をもち指導に当たる。(高等部)	・児童生徒それぞれの実態に合わせ、自分の意思を伝えたり、相手からの情報を受け取ったりする自立活動に取り組み、やりとりする力が向上した。 ・日本語の「読む・書く・話す」力を各学部で設定した評価テスト等を実施し、「日本語の「読む・書く・話す」力が向上した」と回答した教職員90% ・日本語の言葉「読む・書く・話す」力や漢字、筆談、やりとりする力が以前より向上したと回答した児童生徒100%			
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○幼児児童生徒が交流及び共同学習を通して、豊かな心を身につけ、障害理解を深めるために交流年間計画85%以上を実施する。	A	・錦華幼稚園との交流は年間5回を計画し、4回実施した。久留米聴覚特別支援学校との交流についても計画的に行うことができ、充実した交流となった。「お話会がらがらどん」によるお話会も計画通り12月に1回実施した。(幼稚園) ・各学年で開成小学校との交流を実施した。久留米聴覚特別支援学校との交流では、音声や手話、身振りなど、様々な手段でのコミュニケーションを楽しむことができた。6年生は学校紹介も行い、堂々と発表することができた。居住地校交流で、体育祭や学年の行事に参加し、地域の子どもたちとの交流を深めることができた。(小学部) ・1学期に北山校、2学期に松梅校との交流を実施した。久留米聴覚特別支援学校との交流は2月5日に実施予定である。居住地校との交流は2年生が1月に三田川中学校で行った。来年度も、各交流校と連絡を取り合って交流を計画していく。(中学部) ・牛津高校との交流を、本校体育祭(10月)、牛津高校文化祭(11月)、卒業生お別れ会(2月)と実施し、同世代の高校生同士の交流を楽しみながらお互いに刺激や学びを得ることができた。(高等部)	A	・児童の様子について情報共有し、学部全体で児童の生活を見守り、支援することができた。 ・特に大きな児童生徒間のトラブルは見られなかった。研修等を通して職員間の連携の大切さも改めて感じることができたという意見もあった。次年度以降も職員間の連携を深め、未然防止・早期発見に努めたい。	
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○いじめの未然防止、いじめの早期発見、いじめ事案への対応 ○「児童生徒間のトラブルが、大きな問題になる前に適切に対処している」と回答した教職員90%以上	・児童生徒間の交友関係を日頃から注視し、問題に繋がらぬトラブルを早期に発見し適切に対応する。 ・学校生活アンケートを実施し、結果から早期発見、対応する。(生徒指導部)	・児童の様子について情報共有し、学部全体で児童の生活を見守り、支援することができた。 ・特に大きな児童生徒間のトラブルは見られなかった。研修等を通して職員間の連携の大切さも改めて感じることができたという意見もあった。次年度以降も職員間の連携を深め、未然防止・早期発見に努めたい。			
	●児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていてと思う」と回答した児童生徒80%以上 ●「将来の夢や目標を持っている」と肯定的な回答をした児童生徒80%以上	・幼児教育において育みたい資質・能力に関する学部研修の実施。 ・体験活動では、幼児に活動の見通しと学びの振り返りを行う活動を仕組む。(幼稚園) ・学年や学期始めに目標を自ら設定し、その目標達成に向けて努力ができるように活動を設定したり、児童との関わり方を工夫したりする。(小学部) ・生徒の良い行動が見られたらその都度褒め、褒めることから始める指導を実践する。(中学部) ・生徒の希望や実態に応じた就業体験学習を実施する。(高等部) ・集会時に、児童生徒に振り返りと今後の見通しを考える活動時間を設定し、自主的に意欲的な態度を育む。(生徒指導部)	・学習の終わりに感想の発表をし、自分が頑張ったことや楽しかったことの確認をすることで、達成感を味わうことができた。 ・どの学年も学期間の短期的な目標や、将来の社会参加に向けた大きな目標を掲げ、日々努力している様子が見られた。			
●健康・体づくり	●望ましい生活習慣の形成	○望ましい生活習慣への理解を深めるとともに意識の向上を図る。 ○望ましい生活習慣を送っている幼児児童生徒の割合80%以上	A	・12月に実施したアンケートで、「望ましい生活習慣を送っている幼児児童生徒の割合」が83%で4月より7%上昇し、目標を達成した。今年度、新たに「生活リズムチャレンジ週間」を年に2回設定し、家庭と連携しながら取り組むことで望ましい生活習慣の理解を深めると共に意識を高めることができた。			
	●健康を考えて行動できる能力の形成	○幼児児童生徒および保護者の健康に対する興味をもつことができるよう努める。	A	・生徒及び保護者に担任、寄宿舍と連携して保健指導を行い、健康について共に考える場を設定し、本人と保護者に意識づけをすることができた。 ・「ほけんだより」では、毎号生活習慣について取り上げ、意識の向上を図った。 ・幼児児童生徒の各課題に応じて、手洗い、歯むこ、月経指導等の保健教育を行い、健康に対する興味や関心、意識を高めた。			
●地域支援	●効果的な地域支援に向けた特別支援学校のセンター的機能の充実	○早期発見・療育につなげるために、県子ども家庭課の新生児聴覚スクリーニング検査担当者や各保健福祉事務所の担当者、市町の保健師の方々と少なくとも1回は連絡をとり、連携に努める。 ○公開講座や佐賀音での研修会等の際に、県内全ての難聴学級担任に挨拶したり、学級の状況を尋ねたりして連携を図り、必要に応じて巡回相談へつなげる。	A	・佐賀市役所職員を対象に研修会を行った。また、佐賀市の乳幼児相談会終了後、保健師対象に、ろう学校、盲学校の乳幼児教育相談についての説明を行った。 ・乳幼児教育相談の取り組みについて、4月から12月まで20回SNSで発信した。 ・佐賀地区、杵築地区、唐津地区の保健福祉事務所主催のおひさまの会に参加し、連携をとった。			
	○公開講座や佐賀音での研修会等の際に、県内全ての難聴学級担任に挨拶したり、学級の状況を尋ねたりして連携を図り、必要に応じて巡回相談へつなげる。	・年度当初に、県内の難聴学級担任に向けたアンケートを実施し、聴覚障害児童生徒への指導についてのニーズを掴む。 ・巡回相談や教育相談(電話での相談も含む)があった後も、必ず連絡をとり、状況の把握や支援指導のサポートを継続して行う。(支援部)	・県や市町の保健師の方々を対象に研修会を計画し、夏休みを目的に実施する。 ・早期発見・療育につなげるために、SNSで本校の取り組みについて発信したり、保健師や保育園、幼稚園、子ども園に乳幼児教育相談のちらしを配布及び説明したりする。(支援部)	・県内の難聴学級について、8割以上の担任の先生方と話をすることができた。 ・巡回相談後、気になるケースについては、複数回連絡をとり、連携に努めた。 ・次年度に向けても、巡回相談や研修会のニーズについてアンケートを実施している。			
	○地域の難聴学級や通常学級に在籍する児童生徒への自立活動の指導や合理的配慮等についての情報を夏休みを目的にまとめ、紹介する。	・1学期の間に本校で行っている自立活動の指導や合理的配慮についての情報を集める。 ・支援部を中心に、自立活動の指導や合理的配慮についての案を出し、学部内でも検討する。(支援部)	・自立活動についての相談期間を設け、各学部の支援部員を中心に教員の相談に対応した。 ・相談のアンケートを参考に、自立活動の指導の参考資料を作成している。				
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減 ●年間20日の年次休暇のうち、職員1人当たりの年次休暇の取得日数14日以上	・各種会議の精選、及び時間短縮のために資料を事前配布する。 ・共有フォルダの有効的に活用し、効率的な業務遂行に努める。(教務部)	A	・定例の職員会議や学部会等、事前調整をしっかりと行うことで、書面開催も増えたこともあり、前年比で毎月の時間外在校等時間の縮減を図ることができた。 ・令和7年の年次休暇取得日数が14日以上とできた。			

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目		重点取組		具体的取組		最終評価	
評価項目	重点取組内容	成果指標(数値目標)	達成度(評価)	実施結果	達成度(評価)	実施結果	達成度(評価)
○聴覚障害教育の充実	○専門性(知識及び指導)の向上とスキルアップ	○「ろう学校における専門性を高めるための教員研修用テキスト2011年改訂版」の自己評価チェックリストを年3回実施し、評価が向上した教員85%以上	A	・校内外の各種研修会に積極的に参加し、研鑽を積む。研修で学んだことを学部内や教科部会等で共有する。(各学部・教科部会) ・研究授業、公開授業の実践と評価を行い、聴覚障害教育の授業等に必要なお見識を醸成した実践力を養う。(各学部)	A	・「聴覚障害教育の専門性が以前より向上した。」と回答した教職員95%	
○開かれた学校づくり	○聴覚障害や学校の情報を公開	○「学校の情報を多く発信した」と回答した教職員80%以上 ○各学部のホームページ更新を年間5回以上実施 ○「学校の情報を多く発信した」と回答した保護者80%以上	A	・学校だよりを年3回発行し、HPの更新を通して学校情報の発信を充実させる。 ・学校公開を年に2回実施し、本校の教育活動や聴覚障害教育の理解啓発を図り、相談等に応じる。(教務部・支援部)	A	・「学校の情報を多く発信した。」と回答した教職員96% ・多くの部署でホームページの更新を5回以上実施した。 ・「学校の情報を多く発信した。」と回答した保護者94%	
○学部間連携による組織体制の確立	○学部間の情報を共有	○「学部間連携が取れた」と回答した教職員80%以上	B	・主事会や運営委員会等を通して、学部間や分掌部間の連絡を密にしながら、情報共有を図る。(教務部) ・学部間で教科等ごとの情報交換や意見交換を行い、必要に応じて学部間合同の学習の機会を設定する。(教務部・教科部会)	B	・「学部間連携が取れた。」と回答した教職員79% ・教科部会のあり方について各学部で検討し、主事会で意見を集約した。	

●…県共通 ○…学校独自 ◎…志と誇りを高める教育

5 総合評価・次年度への展望	・年間を通してPDCAサイクルにより適宜改善を図り、最終評価で全16項目のうち14項目をA評価とした。 ・B評価とした個別の教育支援計画の作成・活用については、様式変更の確認作業が滞り、その後の手続きが遅れてしまったことによる。次年度はすぐに改善が見込まれる。また、学部間連携については、行事運営だけでなく、授業研究や日ごろの職員間コミュニケーションを促進することで改善を図りたい。「チームろう学校」として、風通しよく心理的安全性の保たれた職場環境を整備し、教育活動を常時工夫改善していきたい。 ・県内唯一の聴覚障害教育の学校として、職員研修や指導力向上のための研究授業、校内研究等を実施した。特に今年度は専門性向上に係る自己評価表を作成し、より客観的な自己評価を行うことができた。次年度も、この評価表を活用しつつ教職員個々のさらなる専門性向上を図りたい。 ・幼児児童生徒一人一人の個性や能力、教育的ニーズに応じた個別最適な指導・支援を実践し、将来の自立や社会生活に必要な力の育成に取り組んだ。卒業予定者の進路保障も行うことができた。次年度も幼小中高一貫の特長を生かし、自立活動や各授業、学校行事等によるキャリア教育を充実させ、個に応じた将来の進路保障につなげたい。 ・日本語の「読む・書く・話す」力とコミュニケーション能力の育成に取り組む、一定の成果を上げることができた。なお、これらの力の育成の成果を図る評価方法等については、指導と評価の一体化を進めつつ、次年度も継続検討したい。学習評価の二期制を導入したことにより、より長期的な視点で幼児児童生徒の成長や変化を把握できるようになった。このことを次年度も指導・支援の充実を生かしていきたい。 ・聴覚障害教育のセンター的機能を果たすべく、本校の取組に関する情報発信力を強化するためにHP・インスタグラム更新、学校だより発行、学校行事への外部参加の促進等を行った。来年度も開かれた学校づくりの一環として各種広報周知活動に力を入れた。
----------------	--